Ⅱ　スポーツの社会史の可能性

82年春季仙石原研究合宿報告

（1981.　4.8－10.）

報　告：唐木。司会：関。
参加者：川口、伊藤、早川、内海、高津
　　上野、柴崎、坂入、佐藤、神宮

〔報告〕「労働者スポーツ運動研究における社会史的方法の可能性について」（唐木）

今世紀に入ってヨーロッパを中心に展開された労働者スポーツ運動は、労働者のスポーツ要求を主体的に組織化しようとした点で既存のスポーツ運動と一線を画していた。しかしその組織化の過程は、既存のスポーツ運動との競合だけでなく、内部的にも原理的な対立が生じ、相克に満ちていた。労働者スポーツ組織は権力や既存のスポーツ組織からは「社会主義」のレッテルを張られ、1920年代には「革命路線」の選択をめぐって内部分裂さえ起すことになったのである。

こうした相克の歴史はともすれば労働者スポーツ運動が政治運動であったかのような錯覚をまねき、事実多くの先行研究では政治的イデオロギーの分析に大半の叙述を傾けている。だが、労働者スポーツ運動はその成立の経緯からもわかるように、なによりもまず労働者階級のスポーツ要求を実現する目的をもっていた。労働者のスポーツ参加を保障し、労働者の生活にふさわしいスポーツ活動のあり方をもとめていくことに一義的な使命があったのである。もしそうでなかったら、既存のスポーツ運動にたいする自己主張もできなかったはずであろう。したがって、労働者スポーツ運動は、その目的の遂行上政治との関係をもったとしてもそのこと自体が自己目的であったのでなく、基本的には文化運動としての性格をもっていたということができる。

この文化運動としての労働者スポーツ運動をいちはやく強調したのは、ルール大学のH．イーバーホルストであった。彼は自己教育運動として労働者スポーツ運動が労働者、青少年、女子のスポーツ活動をいかに促進してきたかを分析したのであった。そして、この研究方法は西ドイツの社会史学派が「社会と歴史」誌で展開している社会史の方法を基礎にしている。

そこで本報告では、いわゆる社会史的方法論が労働者スポーツ運動の分析にどこまで有効であるのか、またどこに限界をもつのかという点を概観することにしたい。

Ⅰ　社会史の概念

社会史の源流はフランスの「アナル派」にあるといわれている。1929年にストラースブール大学のL．フェブル．M．ブロックらが主宰して「歴史経済社会年報（アナル）」が創刊され、伝統的なマルクス主義歴史学にたいして「新しい歴史学」を提唱する。彼らは、フランス革命などの分析を通じて従来の経済決定論的な歴史方法から抜け落ちる傾向にあった日常生活レベルの「生きた歴史」を発掘しようとしたのであった。

戦後の西ドイツにおいても、この社会史が伝統的な国家史と東ドイツのマルクス主義歴史学にたいする「新しい歴史意識の形成」をねらいとして提唱される。西ドイツの社会史の潮流を代表するJ．コッカによれば、社会史は「国家」と「社会」とが分離現象を起し始める19世紀後半以来の社会構造を「自ら発展する全体系」として把握し、社会的事件、出来事の背後にひそむ「めったに変化することのない現象」を探り出そうとする。そこでは、人間と人間の結びつきのあり方、職業生活や日常生活にあらわれる伝統的な行動様式が注目される。同時にコッカにおいては「経済的要因

との関連」をその方法論上の視野から外していない点も留意しておいてよい。

このような社会史がわが国にも影響をおよぼすにつれ、歴史学の分野で一定の批判的評価がなされる。戦後の史学の主流は、弓削達によれば「社会構成に視点を定めて政治史と社会経済史を中心に進められてきた」のであるが、それをさらに前進させるために社会史の方法がどうつながるのか「未知数」であるとされている。つまり「旧来のパラダイムを以てしては絶対に拾い上げることが出来ない分野」に歴史の光をあてることはできるが、「ともするとたんなる風俗史や古物趣味に流れやす」く「俗っぽい裏面史に終始しかねない」（川北稔）と批判される。そして「社会の全体構造の長期的変化をつねに問うこと」（同）あるいは「国家史の諸問題をもくみこんだ民衆史の創造」（佐々木潤之介）により、変革主体の位置づけを鮮明に把握すべきことが提唱されたのであった。

ところで、われわれの関与するスポーツ史あるいは体育史をこの社会史の論議と重ね合わしたとき、どのようなことがいえるであろうか。従来の体育史はその主流を学校体育制度史・政策史にもとめてもよいだろう。ここでは変革主体の問題を抜きにした国家史があたかも全体史として扱われてきた。J．コッカが批判する「伝統的歴史学」に形式的な追従がなされてきたのである。他方、スポーツ史といわれるものも、「風俗史や古物趣味」に流れ、趣味としての実証主義が一定の評価をもって通用してきたといってよいであろう。いわばわが国の体育史・スポーツ史は「国家史」と「風俗史」という両極に分解して、総合の方法を欠いている。

文化としてのスポーツの歴史をたどる場合、変革主体を視座にすえて過去から現在、現在から未来への文化の発展の法則を導き出す方法をとることがいまわれわれにもとめられており、そうした方法をとるかぎりにおいて社会史が庶民、民衆の日常生活を分析の対象としている点を再評価してもよいと思われるのである。

Ⅱ　社会史からみた労働者スポーツ

つぎにわれわれは社会史の先行研究において労働者スポーツがどのような論理で分析されているか見ていくことにしよう。

社会史では、労働者スポーツは１９世紀半ばから相対的に自立した発展をとげる「労働者文化」の一領域に位置づけられる。そこでまずこの「労働者文化」について定義づけをみよう。

D．ランゲヴィーシェによれば、文化とは「社会的な諸集団の伝承可能な、物質的・精神的存在形式、態度様式、行動基準」を指すものであり、それはいくつかの部分的な「集団文化」に分かれる。「労働者文化」はそうした「集団文化」の特殊個別形式のひとつであり、労働者が置かれた社会的状況によって「下位文化」あるいは「対抗文化」として独自な機能をもつことになる。すなわち、労働者が他の社会集団といちじるしくちがう社会的生活条件にあるときは「下位文化」として自立し、さらに社会主義的労働者運動の成立によって政治性が付加されると支配的文化の拒否と変革をめざす「対抗文化」に変化してきたとする。この定義によれば、１９世紀末に姿をあらわす労働者スポーツは、ブルジョア的な支配的スポーツにたいする「対抗文化」であるということになる。

これにたいしてG．A．リッターは、「下位文化」、「対抗文化」の概念はアメリカ社会の特殊事例や少数民族の文化に適用されるものであって「労働者文化」を規定するにふさわしくないとみる。すなわち「労働者文化」とは、「工業化過程において変化、あるいは新たに形成された人間の関係」を指すのであり、労働者の社会的、政治的行動、価値観、制度を含む「特殊階層的生活様式」のことであるとする。

リッターによれば、こうした独自の「労働者文化」は、労働者の自由時間の拡大にともなって成立したが、第一次大戦後のワイマール時代に「総文化」のなかに同化してしまった。つまり、一方において生活水準が向上し労働者が社会的に統合されるとともに、他方で大量消費と商業主義に促進されて文化活動が多様化、個別化してきたため「労働者文化」と「総文化」とが一体となり、む

しろ労働者は「総文化」において中心的な役割をはたすようになったとみているのである。

このように社会史でいう「労働者文化」として労働者スポーツをとらえた場合、変革主体の問題と階級性の問題とがまったく抜け落ちてしまう。すなわち、第一次大戦までの労働者スポーツは周辺的、異端的、対抗的な少数者の文化であったものが中心的で正当な多数者の文化になったのだということで、階級調和的な現代資本主義社会のスポーツ運動の傾向を合理化しようとしているのである。

しかし、「労働者文化」論はこのような決定的な弱点をもちながらも、労働者の「日常生活の文化」に光をあてようとしているところにもうひとつの特徴をもっている。すなわちリッターによれば「労働者文化」研究の対象になるのはつぎのような生活領域であるという。生活のリズム — 労働者の一生、一年を節目づけている祭、市、年季など、食事 — 肉砂糖の消費、日替りメニュー、衣料・衣服、住居、クラブ（Verein）— 職種別、宗教・地域別のスポーツや歌のクラブ、労働者の祭典 — メーデー、三月革命祭など、文学・詩・劇、そして労働者スポーツがこれに加わる。１９世紀末から２０世紀初頭にかけての労働者にとって、スポーツクラブは「社会的自己同一性を得るための家庭、職場とならぶ重要な場」であった。また、ほとんど娯楽の機会がなかった時代に、クラブは人間関係をとりもつ役割をはたしたといわれる。

こうして、日常生活に注目することにより、労働者がスポーツにどんな期待をかけていたのか、クラブに入ることによって何が満たされたのか、といった主体的な動機が明らかにされる。自由時間の増大がスポーツへの参加を自動的に方向づけたのではなく、労働者にとってほかでもないスポーツが必要であったという理由がここから導き出されていくと思われる。

ところで、「労働者文化」論において個別具体的に労働者スポーツの問題をとりあげているのは、F．ウィーラーである。彼は「組織化されたスポーツと組織化された労働 — 労働者スポーツ運動」という論文で、労働者が主体的にスポーツ要求を組織化したにもかかわらず労働者スポーツ組織への加入率が１０〜２０パーセントにとどまったのはなぜか（残りは既存の伝統的なクラブに入った）という興味ある問題を検討している。ウィーラーによれば、加入率を低下させた重要な原因のひとつは「労働者スポーツの意識的な政治志向」にあったという。つまり、クラブの名称に「社会主義」、「共産主義」、「労働者」を頭に頂いたり、練習の前に政治演説や討論会を行なったりしたことがクラブ、連盟内部の政党分化の原因をつくり、組織運動の戦術をめぐる相克を生み出したのだとする。また皮肉なことにそうした「政治志向」にもかかわらず、政党や組合からは「労働者スポーツは政治的に不十分」とみなされママコ扱いをされたという。結局「あるスポーツ組織が直接的にはあまり政治的な態度をとらなければ政治的に効果をあげられたであろう、ということを見落してきた。だから労働者スポーツ運動の持てる政治的力量をほとんど発揮できなかった」というのがウィーラーの結論となる。

では、労働者スポーツ運動はなぜ「政治的な態度」をとらざるをえなかったのか、また「総文化」から孤立化していったのか。この点について「労働者文化」論はつぎの理由をあげている。一つは、とりわけドイツにおいて、「労働者運動の文化」（組合運動、労働者政党など）と「労働者文化」（日常生活の文化）とが同一視される歴史的必然性があったからだという。つまり帝政ドイツの社会構造、憲法構造が労働者の社会的・政治的参加を阻害するものであったため、労働者が社会層として孤立化せざるをえなくなり、労働者の文化的要求もまた政治的な形態をとって外部に主張されざるをえなかったというのである。もうひとつは、文化の考え方がきわめて限定されたものであったため、「労働者文化」としての独自性をもとめることがかえって政治性を強調することになった、という理由である。つまり、ランゲヴィーシェによれば、当時「労働者文化」として意識されてい

たのは「社会主義的文化」であり、これは「下層の文化的伝統は文化でない」、「大衆文化はプロレタリアの文化的解放に障害となる」ということで「社会の中の社会」、「自給自足の下位文化」という限定をつけたものであった。そこから、たとえば労働者スポーツ運動において「<ブルジョア的>スポーツ興業のサッカー試合を観戦するより、社会主義的スポーツクラブに入って、自分たちの身体を労働運動に役立てるために<鍛え>よ」というような政治戦略的なスポーツ観が生まれたのだとされる。

Ⅲ　社会史的方法の可能性

以上にみてきたように、社会史的な研究方法においては、労働者スポーツ運動は過去の特殊な社会構造を反映した時代制約をもちながら、「総文化」の「労働者文化」化の先がけをなしたものとしてとらえられている。この見方は、さきにものべたように、現代の階級調和的な社会民主主義の文化政策を下敷にして、現代社会の「総文化」をまるごと肯定する論理をもっている。そして当然のことながら、国家史や社会構成体、階級の問題を意図的に排除している。

しかし、労働者スポーツ運動の分析にみられるように、政治とのかかわりを「日常生活の文化」のレベルから、いわば「下からの政治路線選択」という観点で位置づけ、そこにいかなる必然性があったのか分析していこうとする点には従来にない見方がある。少なくとも先験的に労働者スポーツ運動を政治運動とみる見方にたいして反論を用意しているとみてよいであろう。

いまここでただちに結論を出すわけにはいかないが、労働者スポーツ運動研究においては、組織の国際的系列化の問題、反ファシズム統一戦線の問題など政治運動と文化運動との区別と関連をどう設定するかという課題が残されており、社会史からの方法論上の問題提起は具体的事実によってなお検討していく必要があると思われる。そのさい、すでに紹介した佐々木潤之介の指摘、「国家史の諸問題をもくみこんだ民衆史の創造」という社会史の方向は、つねに考慮していかねばならなであろう。

〔討論〕

内海　社会史は、いままでの歴史学を含めての新しい動きのようにうけとれるが、文化史、経済史とはどんな関わりになっているのか。とくにスポーツ文化史との関わりで社会史をどうとり込むのか。

唐木　戦後の歴史学の発展からみると、社会史は含まれてきたし、民衆史の分野もきり拓かれてきたかぎりでは、日本ではとりわけ新しいものではない。しかし、あらたに社会史を提起する人たちには、土台の規定性という公式だけでよいか、それだけで歴史の全体像が描けるか、という発想がある。注目したいのは、とりわけ組織運動としてのスポーツをとりあげていくときに、土台の規定性ということを一方にもちながら、独自の文化の発展なり存在様式があるという両面からみる、そうしたものをこれからつくっていくというときに、上部構造と土台とは異なる第三の領域として社会史から学ぶべきものがあるということである。日本において社会史とつきあわせる形での文化史というものが確立しているわけでもない。家永三郎の文化史がそれだと言えない。未知数である。それは、うけとり方が多様というところにも現われている。

上野　J・コッカの説明は、伝統的な西欧歴史学への批判としてでてきたものとして、それなりに理解できる。つまり、支配階級の歴史を描くランケ流の国家史、実証主義的な、一回性を重んじる国家史とは異なる民衆の歴史の提起として理解できる。しかしとくにアナル派の形成に注目したい。それは、フランス革命史研究から出発し、政治変革と経済的過程のズレをどうみるかを問題にした。そして、農村、農民分析、フランスの労働者の発生、革命の担い手の解明によって、革命史の具体像を提供した。それによって戦後の革命史研究に影響を与え、フランスだけでなくドイツでも三月革命研究で『48年革命の社会史』（シュターデルマン）という本も出ることになる。報告に

あるような社会史の特徴としての「人と人との関係の研究」ということでは、たしかにそういう関心がでている。要約すれば、社会史は経済的変化と政治的変化のズレをふまえて、法則性の把握だけでなく全体的な社会の変化をとらえようとしたといえる。ただ、自分としても評価にふみきれないところがある。風俗史的な面を否定するような批判には同調できないが、それに意味がないとはいえないと思うが、しかし、それらをどういう枠組でとらえるか、というところが不明である。生活史、家族史、民衆史といったことの位置づけも不明ということである。今のところ、良知さんの「歴史的具体化」の方法が社会史の観点として不可欠だとは考えている。

伊藤　報告では阿部謹也の研究が紹介されたが、彼はどういうような社会史研究なのか。

高津　いろんな社会史があるということだが、類型化ないし分類したらどうなるのか。コッカの三分類でいいのか。

唐木　三つを包括する概念が社会史と考える。上野さんの言うように、アナル派のフランス革命研究が主体の側の解明という点で「新しい歴史学」を標榜し、マルクス主義歴史学に刺激を与えたこと、また単なる出来事史でなく、民俗学、民族学、文化人類学の成果をとり入れることを可能にしたことは、社会史が与えた役割として見落せない。社会史は、従来の歴史学が陥りがちな総合化の不在ということにならないように全体として、トータルにつかむことに重点をおいている。その場合、歴史像、時代区分が大きな課題になると思う。トータルな歴史像は不可欠である。

伊藤　構造史的ということで変革のモメントをさぐるという話があったように思うけれども、どうもはっきりしなかった。社会史は、普遍的な歴史学研究の方法なのか、あるいはドイツ、オーストリーなどのここでの研究会でとりあげていこうとするような一国史の特殊な歴史学の方法として優位をもっているのか、またそれが同時にフランスなどの社会の歴史研究の方法としてもとりあげようとしているのかでは大分ちがうのではないか。文化の特質を明らかにするのでなければならないように思うがどうか。

唐木　フランスの場合、構造史が盛んで、記号論などと結びついて、政治、経済とは離れてもさらに人間を規定するもの、普遍的に存在する或るもの、基底的存在を解明することを社会史の課題としている。その点がドイツとも、また日本のこれまでの歴史研究とも違うとらえ方であろう。だから、フランスの構造主義を無批判的に展開する山口昌男への批判もその点に向けられる。したがって、社会史が普遍的な歴史の方法としてあるとはいいきれないところがある。

上野　具体的な歴史対象把握の方法として社会史的方法は有効だが、マルクス主義歴史学の方法にとってかわるとしたら問題だと思う。山口昌男のように、政治、経済に規定されえない或るものとは何かといえば結局、観念ということになり、古い観念史観になる。先に枠組と言った点はそこらへんのことである。

唐木　だから、新しい歴史学の方法論を構築するというわけではない。スポーツの問題にひきよせれば、日常、非日常という区別を明確にしながら、スポーツの世界を社会の中に位置づけていく。スポーツは政治、経済に直接には結びつかないが、しかし政治、経済に規定されている。そういう独自の領域を解明するのに社会史という方法は可能性をもっていると思う。

高津　社会史という視座からどのような新しいスポーツをみる眼が開けるのか。

上野　私の理解する社会史の方法ということで考えていることを言えば、スポーツ運動史という点で階級闘争史、革命史の方法をどう摂取するか、社会発展史と運動史がどう統一されるか、それを統一するものとして社会史をとらえるということである。それがなければ社会史はスタティックな、単なる風俗史などになってしまう。

高津　どうすれば統一は可能か。

唐木　私は、それは二段階というか二段構えで考える。従来スポーツのあり方が個人的な次元で考えられていたとすれば、われわれは運動という

次元で考える。そのことと社会発展の法則とどう結びついているか。あるいは逆にスポーツ運動が社会発展をおし進めていく力となりうるかという形でスポーツ運動を位置づけていく。そうした方法で一つの体系をつくらねばならない。しかし、それもまだできていないのに次の問題が出てくる。つまり、運動と社会発展史を結びつけて、そこになおもれるものがないか。たとえば、ドイツ労働者スポーツ運動では政治要求と日常生活要求の分裂の原因を解明するのに第一段階のものをつめていってそれが出てくるかという問題がある。やはり第二段階を用意しておく必要がある。この点で上野さんの社会史とちがう。政治的課題と日常生活の分裂について、スポーツ運動を政治要求に従属させたドイツの戦前の経験を反省し、批判的に継承する必要がある。日常生活要求を政治がどうかなえていくかという観点からスポーツをみなおしていくということである。

上野　唐木さんの言うスポーツの社会史の展開の場は、一定の構造、社会、生活であるだろう。とすると、トータルな把握のベースとしての「日常的存在形態」とその構造が社会史に入り込む。運動が日常生活と政治との媒介項である。したがって、政治からの運動史だけでなく、日常生活のレベルからの運動史も必要になる。唐木さんの図式での＜日常生活－政治－運動＞は、＜日常生活－政治＞の位相を明確にし、両者を媒介するものとして＜運動＞を位置づけるというようにしたほうがいい。

伊藤　現代史的関心からすれば、社会発展史とスポーツ運動との関係と言う場合、何については政治と切り離してはならないが、何については切断すべきかというこの関係が十分つけられないまま今日まできている。楽しいだけでなく、この点では政治との緊張関係が必要だということをはっきりさせることは現代の問題である。研究の方法として、どう関係を整理するかということを示してほしい。そういう点は歴史研究者の間ではどう総括されているのか。民衆史登場のさいのとりあげられ方を想起すると、記述主義、実証主義という批判がみうけられたが、社会史も同様の批判をうけているのではないか。

唐木　ＲＳＩとＬＳＩの二つのスポーツ・インターは政治路線の上で分裂したのであって、スポーツ運動の内容の上ではなかった。それと日常生活要求とがどう関わっていたのか。関わっていなかったと思う。

伊藤　戦前日本の新興教育運動の総括がすでに出されているが、歴史的主体の側からみた場合、新興教育は二派の潮流から摂取した。つまり、スポーツ運動の場合のＲＳＩからもＬＳＩからも。スポーツ運動の場合、一方の側からだけであった。1930 年代の文化・スポーツ運動は資本主義国の状況を学ばず、教育運動に比べて方法が単純だった。歴史を推進していく主体の状況や認識がどう関わるかが大きな問題である。

高津　文化史とは何か。

上野　文化の社会史ということで社会史に包摂されると考える。

伊藤　そのときの主要な側面、ジャンル、要求は何か。その国の風土というか状況、主体の力量によってちがってくるといえるのではないか。たとえばドイツと異なるフランスの文化状況がある。フランスはどうしても政治史が主要な方法である。これは先ほど社会史は一国史を越える普遍史の方法かと聞いたことと関わる。

川口　どなたでもよいが、日本の体育・スポーツ研究を文化史派、社会史派に分類し、人脈も含めて解説してほしい。

高津　スポーツ文化史というものを意識的にすすめているものはいないのではないか。むしろこれからだと思う。そしてそこで文化史派と社会史派の対抗が生まれるだろう。

川口　高津さんは意識の上ではどちらの方で研究をすすめているのか。

高津　私は主体形成史ということで考えている。制度など静態的なものをふまえたうえで、スポーツをめぐる諸階層の連合を解明するということである。社会史は、変らないというところ、不変性を重視する点で危惧がある。生活構造との関わり

でスポーツを位置づけ、解明する重要性はあるが、その内容を風土まで含めるか、社会構成体に限定的にとらえるかは今後の問題である。それから、社会史の時代区分は、政治史を軸にした従来の時代区分とどう関わるのか。そういった意味で判断を留保している。

唐木　コッカは歴史学的社会科学とも言っている。社会科学的に歴史的にスポーツをとらえることが社会史的方法ということになる。

伊藤　日常生活がどうかということと、主体がそれをどう認識しているかは別である。ズレに着目することが大事だ。前者だけだと構造論になる。変革のモメントを探るためには、構造と認識のズレが末端ではどう動いているかをとらえないといけない。阿部謹也のものは面白いが変革のモメントがみえない。文化史について言えば、非政治的ないし反政治的文化史は結局は非文化史になる。というのは、基本的な関係を見失なうからである。それと、文化を推進する主体との関係は社会史のなかではどう議論されているのだろうか。

唐木　切り離しを主張しているわけではない。アナル派のようにマルクス主義を補完する形でしか進めないと思う。

伊藤　方法上の問題は状況認識のちがいと結びついていると思うがどうか。たとえば、60年代教育運動で、安保闘争の総括によって方向がわかれた。一方は挫折とみて政治と離れ教育に埋没するか、他方は前進とみて一層政治と教育の関係を追求するかの二方向に。

内海　労働者スポーツ運動史における社会史研究の現段階の評価を明らかにしてはどうか。

唐木　レジュメに挙げたル・ゴフの「教会の時間と商人の時間」を紹介したい。（『思想』1979年第9号参照）

上野　スポーツ運動史研究の視座確立のためには、従来の運動史の方法の成果をふまえ、なおそれに足りないものを補なうものとしての社会史の可能性、その積極的根拠を提起することが必要だと思う。

「研究年報１９８２」正誤表

		誤	正
P 2	右上から4	スポーツ活動を	スポーツ活動
	右下から3	組識体制	組織体制
P 3	左下から4	現定	規定
P 11	見出し 3	(1981. 4. 8 − 10)	(1982. 4..8 − 10)
P 23	右下から4	ドキツ労働者体育系連盟	ドイツ労働者体育連盟